

総文祭と文化の足音

2年 小底 桃香

八月、そびえ立つ山々を背に初めて降り立った岐阜の地。飛騨高山の空気を目いっぱい吸って、これから始まる総文祭に胸が高鳴った。同じ東京代表の方々と交流を深めつつ、はやる心を落ち着かせながら眠りについた一日目。自由時間に少しだけ見て回った飛騨の街はどこか懐かしさを感じるような温もりを帯びていて、長旅の疲れも吹き飛び全力で散策を楽しんでしまった。

二日目の文学散歩でまず訪れたのは、飛騨古川の伝統的な建造物群だ。当時の生活感が損なわれることなく展示されているのを見て、普段あまり興味をもって見学する分野ではなかったにも関わらず、年甲斐もなくはしゃいでしまった。木造の平屋に一步足を踏み入れると、ぎしっという重低音と共につんと鼻の奥に広がる独特の匂い。かつてそこで、確かに生活が営まれていた証をひしひしと感じて、非日常に心が躍った。他にも、飛騨古川の街並みを歩いたり、伝統芸能についての展示を見学させていただいたり。豊かな自然と共存しながら今日まで文化が継承されてきたこと、それをこの目で実際に確かめることができたのはこの機会だからこそだ。本当に多くのものを得られた一日だったと痛感した。

三日目はいよいよ参加者の交流会。四十七都道府県の代表者が一斉に会する全体交流会では開催地にちなんだ都道府県対抗クロスワードパズル対決が行われた。かつてない規模感と熱量に圧倒される私を横目に、持ち前のひらめきと語彙力で次々とペンを走らせる参加者たち。私たち東京グループは惜しくも上位を逃してしまったが、ああだこうだと言いながら埋められていく五枚のプリントは、きっとそれぞれにとってかけがえのないものになったはずだ。その後は詩の分科会に移り、まずは自己紹介と雑談で和やかな空気に。各校の文芸部の様子や学校の話など、初めて知ることだらけで新鮮だった。部誌を配っている生徒もあり、私はきつともう次の号を読むことのできないそれを受け取って、絶対になくさないよう大事にしまおうと心に決めた。そして名残惜しくも、とうとう出発の時間に。一生に一回だけの、特別な体験が終わってしまうのは寂しかったが、その寂しさに負けないくらい、そこで得たものが今でも心で輝き続けている。

言葉では伝えきれないくらいのまばゆい三日間。目を瞑ればよみがえる鮮やかな思い出と岐阜の風は、きっとこれからの人生に無限の可能性をもたらすだろう。